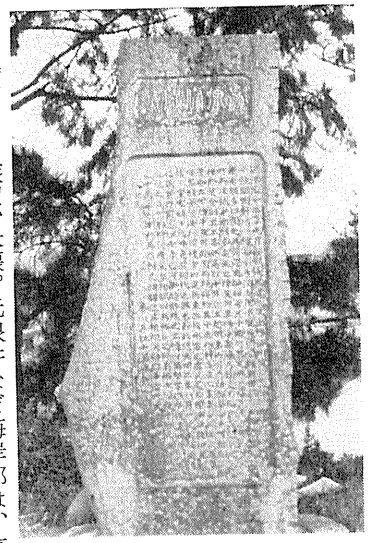
第三節　災　害

一　小松島市の位置

小松島市は、本県の東部沿岸に位置し、勝浦川および那賀川の堆積作用によって形成された沖積平野が総面積の約七〇％を占めている。この沖積平野は、低地が多く、旧小松島町東部の小松島低地、田野低地、旧立江町の櫛渕低地、旧坂野町の塩開低地、旧立江町から旧坂野町にかけての立江低地など、湿田として利用され災害を被ることが多い。勝浦川、那賀川の二大河川は、しばしば氾濫し、旧分流路等を通じて流域に被害を増大させてきた。

年平均降水量は、一八〇〇ミリメートル前後で、瀬戸内型から南海型への漸移地域に当り、台風襲来の多い九月と梅雨前線の停滞する六、七月に降水量が多い。台風は、襲来のコースに当たり、小松島市に影響を与えたものは、明治年間に四〇回、大正年間に一三回、昭和二〇年までに二五回、計七八回となり、一年に一回の割合となる。そのうち大被害をもたらしたものは、平均すれば五年に一回程であるが、明治初期と第二次大戦中に目立って多い。

これは、自然の脅威に対しなすすべの少なかった人々が堤防を修築し、護岸工事を施行し、排水路を設けるなど順次努力しつつ克服して来た歴史を物語っている。自然に立ち向う努力が衰えた第二次大戦中には、再びその脅威にさらされることとなった。自然が人々に与える影響は、そこに住む人々の技術水準、資本等社会環境の違いによって大きく変遷するといえよう。



前原修堤碑

二　明治初期の災害

明治三年　九月六日より台風のため風雨強く、一一日には勝浦川の堤防が決壊。元根井など海岸部は、高潮の被害を受け、内陸部の外開、北開から中田山路端まで潮が入る。横須のお玉井利も被害を受け、日開野、芝生、田野、金磯の各新田にも潮が入り、稲作の被害は、大きかった。撫養の塩田に所々被害が生じたが、吉野川流域の被害は、比較的少ない。一〇月一日、四国、近畿に大風雨があり、三日に吉野川で洪水が発生。

明治四年　七月四日、中・四国、近畿に大雨があり、板野郡川内村の小松新田の堤防が破壊。

明治六年　八月三〇日、中・四国で大風雨があり、吉野川流域で大洪水が発生。一〇月二日、大風雨、那賀川が那賀郡羽ノ浦村で堤防決壊、洪水が発生。

明治九年　吉野川流域で大洪水が発生。

明治一〇年　麦の被害があり、那賀郡坂野村の被害は、特に大きかった。

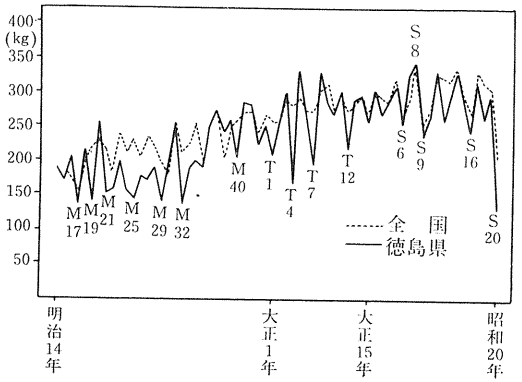
明治一一年　九月七日、那賀川の堤防が那賀郡平島村から羽ノ浦村にかけて一八〇メートル余り決壊し、洪水

となる。

明治一三年　八月二五日、四国、近畿、関東は、大風雨となり、本県は、二四日二〇時ころ、南西の風が最大に達す。

三　明治中・後期の災害

第1図　稲作10a当り平均収穫高
（農林水産省徳島統計事務所の資料による）



明治一五年　五月、本県をはじめ一一県で雹降り、農作物に被害が生じた。八月五日、四国、東海に暴風雨、洪水が発生、稲作に被害が生じた。本県での稲作一〇アール当たり平均収穫高は、一六九キログラムで、明治一四年から昭和二〇年までの同収穫高のうち、悪い方から一一番目に当る。

明治一七年　六月二八日、暴風雨のため吉野川、那賀川流域で堤防が決壊し洪水が発生。八月一一日、台風が九州より四国、南紀をかすめて通過。八月二六日、台風が九州、中国を横断、日本海より東北に再上陸し、全国的に被害甚大。稲作一〇アール当たり平均収穫高一五八キログラム。明治一六年から昭和二〇年までの同収穫高で最悪の記録となる。本県では、二五日一八時より暴風雨はげしく、二六日二時まで続く。各河川で堤防が決壊し、早稲、中稲は、白穂となり被害甚大。一三五キログラム（二位）。坂野村誌は、次のように伝える。「大風雨二百十日前後、稲毛皆無時に白穂という」

明治一九年　九月一一日、台風のため九州、中・四国に風雨、吉野川で洪水発生。水死者六名。稲作の被害大。一四〇キログラム（五位）。夏季、好天が続き全国的には豊作であった。

明治二一年　八月三〇日、台風が本県を通過し、海岸部で高潮発生。北風烈しく坂野村の各海岸で堤防が破壊される。県内死者五一名。稲作被害大。一五二キログラム（七位）。全国的には豊作。

明治二二年　八月一八日、台風が四国中央部を北上。和歌山県での水害甚大。本県も稲作被害大。一五八キログラム（九位）。

明治二四年　八月三日、豆台風が朝鮮海峡から日本海に抜ける。徳島で大雨（日雨量四七一・五㎜）。八月一六日、台風が四国中央部を北上。九月一四日、台風が長崎から日本海に抜ける。度重なる台風のため稲作に被害発生。一五六キログラム（八位）。一〇月二八日、濃尾大地震があったが、本県の被害はなし。

明治二五年　五月二三日、午後から大雨となり、二三時頃から風雨強まる。勝浦川は、満潮と重なり各所で堤防が決壊。橋も流される等の被害発生。七月二三日、高知市付近に上陸した台風が北上し山陰に抜ける。風は強くなかったが、記録的な大雨（徳島で二三日からの二日間で四五七㎜）となり、県南山地の各所に山崩れが生じた。海部郡川上村平井の保瀬で四八名。下木頭村大戸の高磯山で六五名。福原村田野々の葛又山で一六名など全県で三一一名の死者が出た。高鉾村正木の槻地山も崩壊し、藤川を埋め勝浦川は、濁流（「赤土水」という）で満水となる。高潮のため海岸地域は、海水が浸入し被害を増大させた。満潮面よりの潮位は、小松島で一〇センチ、和田島で一三センチ高くなっていた。前原堤防上の修堤碑の端に、この年に作られた石仏が置かれている。稲作被害大。一四二キログラム（六位）。全国的には豊作。

第1表　坂野村の一農家における平均収量（kg）と平均価格（円）及び徳島県、全国の平均収量

年	坂野村K家 10a当たり平均収量	坂野村K家 100kg当たり平均価格	徳島県 10a当たり平均収量	全国 10a当たり平均収量	年	坂野村K家 10a当たり平均収量	坂野村K家 100kg当たり平均価格	徳島県 10a当たり平均収量	全国 10a当たり平均収量
明治14			191		大正 2	341	21.73	259	255
15			169		3	344	17.41	299	290
16			207	178	4	320	8.73	167	282
17			135	158	5	410	11.29	333	292
18			215	198	6	313	17.16	253	274
19			140	216	7	280	29.23	194	273
20			258	230	8	374	32.49	331	302
21			152	218	9	372	20.17	287	311
22			158	184	10	340	25.46	265	271
23			201	238	11	359	21.39	297	300
24			156	211	12	313	24.01	218	272
25	281	4.36	142	229	13	364	28.40	288	283
26	273	5.58	178	205	14	403	25.31	296	291
27	285	5.71	173	234	15	379	24.25	256	272
28	233	5.87	191	219	昭和 2	454	19.95	307	301
29	193	6.85	138	198	3	371	18.38	266	291
30	270	9.60	199	181	4	366	18.39	290	289
31	292	6.11	254	257	5	442	12.09	307	318
32	224	7.47	135	214	6	396	14.71	252	262
33	223	7.52	188	224	7	445	13.81	322	286
34	240	8.39	201	252	8	413	16.25	343	345
35	246	9.11	192	199	9	369	18.15	236	253
36	285	8.11	248	249	10	368	19.95	263	276
37	295	8.17	273	275	11	427	20.45	329	323
38	286	9.03	240	203	12	361	22.35	255	321
39	329	10.21	259	244	13	377	23.97	293	316
40	285	10.41	205	258	14	440	28.54	328	333
41	335	8.57	285	272	15	365	28.57	284	298
42	357	7.78	281	273	16	305	29.42	240	269
43	309	10.76	223	242	17	365	29.45	314	329
44	318	13.35	253	267	18	329	29.34	260	313
45	313	13.70	208	258	19	333	—	293	304
					20	258	44.33	130	208

（坂野村大場K家及び農林水産省徳島統計事務所の資料による）

明治二六年　二月二七日、南方海上を東進した低気圧のため平野部で大雪となり、徳島では明治四〇年に次ぐ第二位の積雪（三三センチ）を記録。

明治二七年　五月より八月まで雨量少なく、夏季は、記録的高温が続いたため、各地で水争いが生じた。那賀川北岸では、大井手用水の渇水がひどく、七月一九日、千余名が舟路を開削すると称し、延長二四〇〇メートルの川ざらえを行い、南岸の堰を堀切ったため、二〇日、両岸から六〇〇名がにらみ合い烈しい石合戦となり、負傷者数十名を出した。「日照りに不作なし」の言葉通り稲作の被害はあまりなかった。

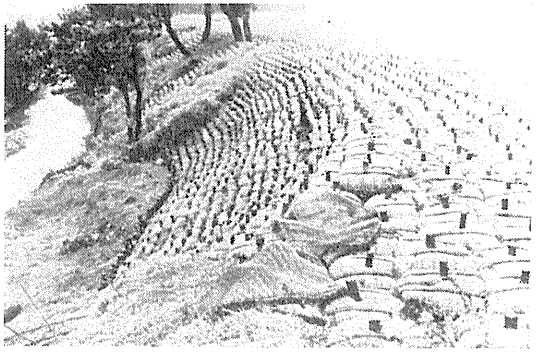
明治二八年　八月二二日、高知県に上陸した台風のため、一日雨量、那賀郡鷲敷で四〇一ミリメートル、小松島で一七七ミリメートルに達し、那賀川、勝浦川等で洪水の被害が生じた。

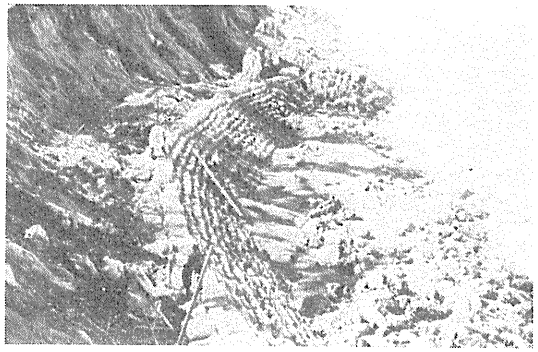
明治二九年　七月から九月にかけて低温と多雨が続き、特に九月三日から一二日にかけて四国沖に秋雨前線が停滞し、一一日には、台風が四国南岸をかすめる。一〇日間の総雨量は、徳島で七六〇ミリメートル、海部郡日和佐で一〇三四ミリメートルに達した。稲作は、一三八キログラム（四位）の大不作となった。勝浦郡、那賀郡での被害特に大きく、坂野村のK家の資料では、一九三キログラムで明治二五年から昭和二〇年までの最悪の平均収量を示している。

明治三二年　七月八日、九五三ミリバール以下の台風が鹿児島県に上陸し、ゆっくり北上した。八日からの二日間の雨量は、小松島で二七四ミリメートル、特に勝浦川上流で多く、吉野川、勝浦川で堤防が決壊し、全県での死者八二名。勝浦川流域での死者五名。勝浦川は、江田村で堤防決壊し、大洪水にみまわれる。神田瀬川が本流と化し、神代橋が半壊。九月八日、九七三ミリバール程度の台風が本県南岸沿いに北東に進み、和歌山付近に上陸。勝浦川では、上流の高鉾村正木で山岳が崩壊し、下流では、七月九日に決壊し仮止堤防となっていた江

田村の堤防を濁流が襲い、さらに上流部の前原村にかけて一六〇メートルに及ぶ大決壊となり、旧分流の菖蒲田川が本流と化し、神代橋は、崩壊。小松島町は、約一か月間濁水の中に置かれた。このため死者二名、流出家屋一八戸。金磯新田では、護岸堤防が破壊され、海水が全村を浸し、倒壊家屋五戸、砂礫にうずまる田畑の被害五〇ヘクタール余り、荒廃田五八〇ヘクタール余りにのぼり未曽有の大被害となった。

古来より大洪水のある年は、前後二回にわたって襲って来るといわれている。一回目を「姉水」、二回目を「妹水」という。妹水に当たる九月八日の大洪水は、近代に入って勝浦川下流域における最大規模の被害をもたらした。これは、一回目の洪水で軟弱となっていた堤防を二回目の洪水が襲い被害を倍増させたためである。藩政期最大規模の被害を出した慶応二年の「寅の大水」もこれと同様であった。また、二〇日から三〇日にかけて連続して降雨があり、特に二二日は豪雨となり、勝浦川は、再び決壊し、小松島全域が浸水、床上浸水二〇〇〇余戸に達した。九月の月間雨量は、勝浦川上流で県下の最高を示し、一四〇〇ミリメートル以上に達している。このため一〇月から翌年六月にかけて九〇〇メートル余りの修堤を実施し、以後、勝浦川の大規模氾濫はなくなった。小松島市前原町の勝浦川堤防上にこの時の修堤碑が現存する。





大手海岸の復旧作業

西日本に上陸した台風五個と八月の低温（徳島で平均気温二六・一℃、小松島で二三・〇℃）、九月の日照不足（徳島では、低温、多雨、少照共に一位）など天候不順のため稲作の被害は、甚大であった。一三五キログラム（二位）。勝浦郡はさらに悪くこの年の県平均の八五％にも達しなかった。

明治三三年　九月二八日、大型台風が四国沖を通過したため、二七日の雨量は、小松島で二三五ミリメートル、勝浦郡福原で二〇七ミリメートルに達し勝浦川は、増水したが前述の修堤が完成していたため被害は少なかった。

前原修堤碑文

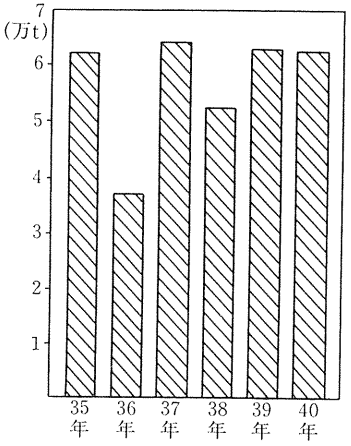
明治三十二年九月疾風大雨連日不止
勝浦川波濤努漲前原堤防砕摧九十余間
倒樹木汨陵谷滔々洶々
衝小松島浦金磯新田然後入海
人家之流壊者頗多
田園之為沼沢或砂磧者五十余町
其荒廃為瘠土者五百八十余町而
凍餓者亦頗多矣天之降災何其惨乎
県庁之遣吏存問以定修堤之計
補給資金助其工事於是以十月起工
越明年六月奏効修築者五百余間
工費金二万四千三百余円而
県補給其十之八
村長及工事委員咸日夜黽勉任其経営
潰者以固壊者以完
爾来無復水害之虞荒廃田園漸次復旧
五穀穣々室家嬉々嗚呼是皆昭代之賜也
蓋此堤天明二年八月一決於
此災後之民資力窮之
以七年正月漸竣修堤之工伝以称堅牢而
今復遭此災則存此地之民宜勤倹治産
荒怠相誡以為他日之計矣而

亦以便千万人且可垂之千万年而不朽焉
乃村民相謀記其梗概

並勒興事者之氏名千碑陰以伝後人云爾
大正三年一月建之

明治三六年　前年一一月から本年四月にかけて平均気温より〇・七～二・二℃高い暖冬が続き、さらに三月から五月にかけての多雨が重なり、記録的な麦の凶作となった。また、三化螟虫が大繁殖し、立江、坂野の稲作に被害をもたらす。

第2図　徳島県における麦作収穫高
（明治35～40年）



明治三八年　六月九日以降六月中、ほとんど連日降雨で麦の収穫に影響が出る。八月は、全国的に低温状態が続き稲作の被害は甚大。本県の被害は、比較的少なかった。

明治四〇年　二月一一日、低気圧が四国沖を通過したため大雪となり、積雪量、徳島で四二センチに達し、明治以降の最高記録となる。八月二三日から二五日にかけて四国沖に停滞した熱帯性低気圧のため、本県中央部沿岸で大雨となり、小松島で三日間雨量四四九ミリメートルに達し、この雨による県内最高記録を示す。九月四日、九州西岸に上陸した速度の遅い台風のため勝浦川上流を中心に四日からの五日間で多量の降雨をもたらす。福原で一〇二六ミリメートル、小松島で四〇五ミリメートルに達した。天候不順は、稲作に被害を出す。二〇五キログラム。

四　大正期の災害

大正一年　九月二二日、県南海岸を北東に進み、夜半小松島を通過し阪神に上陸した大型台風（徳島で九五六ミリバール）のため、二二日より二日間雨量は、勝浦川流域で五〇〇ミリメートル以上、那賀川中流で六〇〇ミリメートル以上に達し、勝浦川の丈六寺、那賀川の岩脇で六・三メートルの出水をみた。室戸台風と類似したコースをたどり、本県の各所で水害をもたらし、海岸部では高潮にみまわれた。死者八一名。一〇月二日にも台風が四国を通過するなど稲作の被害大。二〇八キログラム。

大正三年　暖冬、多雨のため麦作は、明治三六年に次ぐ被害を受ける。

大正四年　九月八日、鹿児島県に上陸した台風が九州を北上、雨量は、一般に少なかったが稲の開花期に当たりカラ風のため、明治三二年以来の大被害となる。一六七キログラム（一〇位）。特に海部郡の被害が大きく、この年の県平均の五三％程度であった。五月一日、和田島小学校の西棟が火災で焼失する。

大正七年　八月二九日、室戸から本県の海岸をかすめ和歌山に上陸した台風のため、一日雨量、勝浦川上流福原で四〇八ミリメートル、那賀川中流で三〇〇ミリメートル以上に達し、那賀川で洪水が発生。九月一四日、南紀に上陸した台風は、雨量は少なかったが、稲の開花期に当たり、八月の低温、多雨と重なり稲に被害を与えた。一九四キログラム（一八位）。一〇月ころから流感（スペイン風）が大流行する。

大正一〇年　六月は、梅雨のため低温、少照となり、大正三年以来の麦の不作をもたらした。

大正一二年　九月一日、関東大地震、徳島での震度四、本県での被害なし。九月一五日、室戸岬南方から南紀に上陸した台風は、晩稲の出穂期に当り被害をもたらす。二一八キログラム。

五　坂野大手海岸の災害

那賀川平野は、那賀川により運搬されて来た土砂が堆積された沖積平野であり、坂野から和田島にかけて内陸部に旧砂丘がみられる。那賀川河口（現在は、那賀川町出島の南方に固定されているが、かつては、幾筋かに分流し下苅屋、色ケ島、江野島等に河口を持っていた）から供給された土砂は、沿岸流によって運ばれ卓越風とあいまって、坂野ついで和田島の二つからなる分岐砂嘴を形成した。那賀川河口の固定化が進むと共に和田島南東部（東分）から江野島、色ケ島にかけての海岸浸食が著しく進み、ここで浸食された土砂は、沿岸流によって北西に運搬され、和田島北部（和田ノ鼻）の新しい砂丘、浜堤を形成している。

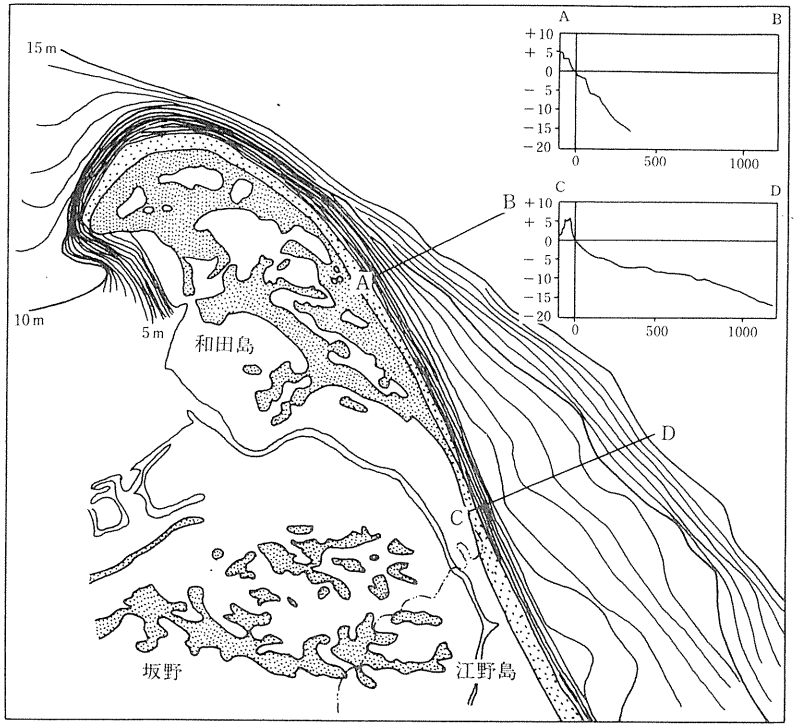
明治以降の海岸線の変遷をたどってみると、明治初年ごろは、今津村江野島において現在の海岸線の沖合二五〇メートルに松林からなる自然の安定した海岸があった。また、和田島砂嘴の北端より陸の方一五〇メートルの地に石積の旧護岸が残っていることなどから、和田島東部の浸食と北部の堆積の様子がうかがわれる。明治一七、一八年ころに江野島海岸に簡単な制水工事を行っているが、これが海岸浸食による海岸線変遷の第一歩であったと思われる。明治二五年七月二三日、高知市付近に上陸した台風が北上し、県下に大災害をもたらしたが、坂野・今津大手海岸では、南南東の風強く高潮を伴った波濤のため松林からなる堤防が破壊され、大被害をこうむった。これにより、初めて国庫補助を受け石積築堤を施行した。しかし、海岸線の後退は、次第に急激となり同一位置において堤防線を推持できなくなり、明治三八年、江野島において旧堤防を放棄し長さ七九〇メートル、明治四〇年には、南へ延長され、芳崎まで九一八メートルの退却築堤が施行された。明治四四年八月一五日鹿児島に上陸し北西に進んだ大型台風の被害により、明治四五年、江野島では再び四三一メートルの退却築堤が施行された。

第３図　坂野大手海岸（左、大正６年測図。右、昭和37年修正測量　25,000分の１地形図）
承認番号昭54四複　第141号

大正一年九月二二日　大型台風が室戸台風とほぼ同じコースを進んだため、県内の海岸部は、高潮にみまわれ、大手海岸の海岸浸食は、さらに進行し、大正二年、色ケ島において二八七メートル、大正四年、全域において一六六九メートルの退却築堤を施行した。これらの退却築堤により、田畑、宅地二五ヘクタール、原野二〇ヘクタール、人家六四戸が堤防外に放置され海中に没した。大正六年測図の地形図では、堤防外にまだ砂浜がかなり残っており、江野島では標高二・五メートル以上の浜堤が海岸線に沿って長く残り、標高六・五メートルの部分も存在していた。和田島南東部では、標高五メートル以上の旧砂丘の浸食が進み、海岸線付近は、延長一二五〇メートルにわたって崩を呈している。

昭和に入って海岸線の後退は、より急激とな

第４図　坂野砂丘・和田島砂丘および測深図（測深年月　昭和27年７～８月）



り、昭和四年、本海岸を県営に移管したが、このころには堤防外の砂浜は、ほとんど消滅した。昭和九年九月二一日の室戸台風は、本海岸から約一五キロメートル西を北上したため、海側から台風に吹き込む南東の猛烈な風と高潮が直撃し、堤防の破壊と入潮がおびただしく海岸線は、さらに後退した。放置し得ない状態に陥り、昭和九年より三年計画で災害助成工事として堤防及び突堤の新築工事を行った。和田島においても、二九〇メートルの退却築堤を施行した。これが以後の災害をこうむりながらも、大工事を加えつつ辛うじて保持し得ている現在の海岸線である。

以上のような和田島砂嘴の形成と海岸浸食は、浅海部の海底地形によく反

映しており、和田岬の西の小松島湾内の汀線勾配は、五・〇二％から三・四％、〇・六％と漸次緩やかになっており、五〇〇メートルより沖合は、ほとんど水平である。海岸線が沖合に前進している和田岬の北の汀線勾配は、六％前後であるが、五〇メートルから一〇〇メートル沖合で一〇～二〇％の急勾配を呈している。海岸浸食の著しい和田島東南部から那賀川町苅屋入江付近では、汀線勾配は、五～七％であるが、それより沖合五〇〇メートル付近までは、〇・四～一・五％のほとんど水平に近い勾配となり、広大な棚をなしこの付近の海岸線より約二五〇メートルの地点に旧護岸の根が残っているのが海岸調査によって確認されている。汀線勾配が最大値を示しているのは、小松島市と那賀川町の境界付近で浸食が最も著しい場所と一致する。

本海岸の平均方位は、北二〇度西をなしているため、北西成分の風は、陸より海に向い海岸構造物に対して安全な風向きといえるが、南東成分の風は、海から陸に向う風となるため危険な風向である。したがって冬季は、北西風が卓越し安全であるが、春季から南南東の風が卓越し始め、夏季において最も危険な状態となるものといえる。これは、既往の災害発生状況からも立証されている。

六　昭和初期の災害

昭和六年　七月は、連日のように梅雨が続き、降雨のなかった日は、二日間しかなかった。このため気温は、低下し平均気温で二・一℃低く、七月としては最低気温となり日照時間は、平年の半分に満たず稲の成長が不十分で、さらに虫害が発生し、九月、十月の台風も重なり、稲作の被害大。二五二キログラム。

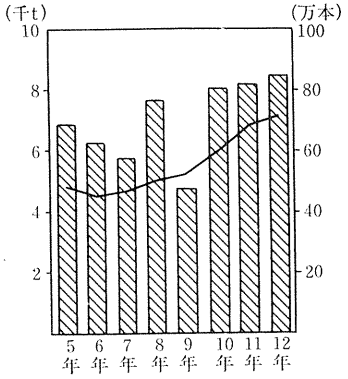
昭和七年　二月二五日、低気圧が四国沖を通過したため平野部で大雪となり、小松島で三五センチ、徳島で三一・三センチの積雪となる。また二月から四月にかけて低温が続き、ミカン等に被害を生じた。

昭和八年　八月中に一〇日間の雷雨があり、坂野村では、二七日に落雷により一名の死者が出る。六月から九月にかけて晴天の日が続き、特に九月に入って好天となり一部で干害を受けたが、「日照りに不作なし」のたとえ通り稲作は、大豊作となり戦前における最高記録となる。三四三キログラム。

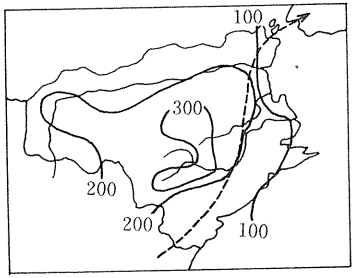
昭和九年　九月二一日、四時半高知県奈半利町に上陸した台風は、時速六〇～七〇キロメートルで北東に進み、五時ごろ宍喰川上流小谷付近から海部川中流の大井、若松付近を通過した。この間、室戸測候所では、五時一〇分に九一二ミリバールの最低気圧を観測した。その後、日野谷村西部に入り進路を北北東から北に転じ、鷲敷町を経て勝浦郡横瀬町久国と三溪との間を通り、多家良村西部から上八万村の東部に入り、六時一〇分には、加茂名町西部をかすめ進路を北東に変え、大津村を経て六時半過ぎ鳴門村を通過して淡路に去った。この間、徳島では、六時に最大風速南東の風毎秒三六・七メートル。六時一〇分から五分間風衰え、六時半に九四二ミリバールの最低気圧を観測している。これが史上空前の大災害をもたらした室戸台風である。

この台風は、本県山岳部の東斜面をかすめて北上したため、進路の右側に当る東部海岸地域は、風が著しく強かったが、雨量は、比較的少なく二〇〇ミリ

第5図　徳島県におけるミカンの収穫高及び樹数（昭和5～12年）



第6図　室戸台風の経路と雨量（9月17日～20日、4日間合計）



第2表　室戸台風による本県の被害（県保安課調査）

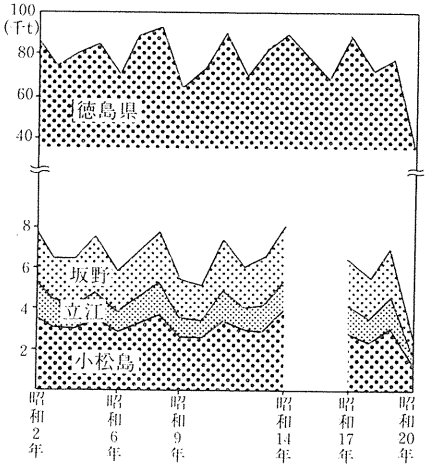
郡・市	人			家					被害見舞価格(円)
	死	不明	傷	全壊	半壊	流出	床上浸水	床下浸水	
徳島市	1		1	133	81	8	4,650	9,800	1,520.000
名東郡	4	1	63	222	103	1	319	674	1,003.000
名西郡	1		4	73	45		55	96	685.407
板野郡	4		30	356	351	25	1,644	3,256	2,028.862
阿波郡	4		4	87	78		63	199	557.500
麻植郡	2		2	54	19	1	23	81	325.992
美馬郡	3		6	57	41	8	148	154	512.327
三好郡	1	1	3	34	40	4	30	106	260.841
勝浦郡	4		5	29	262	5	97	875	480.430
那賀郡	9		104	699	768	14	38	448	643.304
海部郡	4		77	376	231	68	134	268	1,507.573

メートル以下にとどまった。小松島近辺での台風の眼の観測は、横瀬町久国で「東風が西風に変る時、七、八分間小雨無風状態となる。わずかに青空見ゆ」との報告がある。台風の中心が海岸線から五～一六キロメートルを北上したため海岸付近は、海側から台風に吹き込む猛烈な風と記録的な低気圧で潮位が上がり、さらに大潮と重なり、高潮が沿岸部の大部分を襲った。小松島港内の検潮器は、五時四〇分に最高位に達し、平均水面より二・七メートル高を記録、天文潮位を引いた偏差は、一・四〇メートルに達している。千歳橋上流、下流に避難していた船が橋に激突し崩壊の危険性が高まり、消防団、青年団が総出動で警戒する。打瀬船が一条通り路上に打ち上げられ、小松島駅前筋、新開地の低地一帯は、潮が流入する。風当りの強い県南海岸や台風の中心が通過した鳴門では、最大偏差二メートルを記録した。小松島では、二〇日一七時ごろからやや風が強くなり降雨があ

った。二一日〇時ごろより風雨烈しくなり、五時から六時までが最も烈しく、七時ごろから風雨共弱まり八時ごろには雨も止んだ。この間の雨量五三・〇センチと少ない。

県下の被害状況は、第一表のとおりであり、台風の左側に集中する。住宅の崩壊は、大字小松島で五一戸、田浦、前原、江田で一四戸、中郷で四五戸、日開野、新居見で九戸、芝生、田野で一一戸である。坂野村和田島では、住宅の倒壊、半壊が一〇〇戸、保安林の流出一〇〇〇本、倒壊三〇〇本。新開小学校は、国道沿いの低地にあったが全壊した。創立以来三回目の災害を被ったため、現在位置に移転されることとなった。国鉄立江駅も全壊。神社・仏閣等の古樹、大木の被害も大きく、田野にあった史跡の一里松が根元から折れ、中田の千代の松原、横須松原も倒壊のため著しく薄くなり、立江八幡神社では巨木が倒れ、石の鳥居を破壊した。

第7図　小松島各町村及び徳島県における稲作収穫量（県統計課保管の資料による）



この室戸台風は、稲作に与えた被害は甚大で、大正一二年以来の不作となった。二三六キログラム。また、ミカンの被害も大きく、昭和五年からの十年間平均作の六九・五％にしか達しなかった。

昭和一〇年　六月二七日より三〇日、梅雨前線による大雨のため小松島では、四日間に三八九ミリメートルに達す。特に二七日だけで二一九ミリメートルの豪雨があり、洪水警報が出された。八月二八日、鹿児島県に上陸し日本列島を縦断する大型台風は、那賀川上流で三日間に七三一ミリメートルの豪雨をもたらし、那賀郡に大きな被害を出した。九月二五日、豊後水道を北上した台風など全般に悪天候が重なり、前年に続いて稲作に被害が出た。二六三キログラム。現小松島市域は、前年以上の不作となる。

昭和一三年　三月、五月、六月は曇天、少照となり、麦に被害が出た。平均作の七七・七％。

昭和一六年　八月一五日、室戸の西に上陸した台風が北上し、四国を横断。風は強く、徳島で南東の風毎秒三七・八メートルと徳島測候所開設以来の強風を記録、小松島魚市場で一五〇トンの機帆船が沈没する。雨量は、三日間に那賀川中流で六〇〇ミリメートル以上、小松島で一一一ミリメートルとなる。一〇月一日にも、九州から中国にぬける台風があり、徳島で南南東の風毎秒三三・七メートルと室戸台風に次ぐ強風を記録、横須海岸の堤防が約一八メートル破壊される。この二つの台風のほか、八月から九月にかけて照天が少なく、稲作は、昭和九年以来の不作となる。二四〇キログラム。

昭和一八年　二月二日、坂野小学校の学芸会で二階にある講堂の床が三〇平方メートル程落下、死者一名、負傷者多数を出す。七月二四日、衰退した台風が愛媛県を北上したが、雨量は、多く小松島で二日間に四八六ミリメートルに達し、田畑の多くが浸水した。九月二〇日にも、高知県西部に優勢な台風が上陸し北上。八月、九月は、好天の日が多く、全国的には豊作であったが、本県は、台風の被害が大きく不作となる。二六〇キログラム。

昭和二〇年　昭和一八年から引き続き三年連続の寒冬は、本年に入ってさらに顕著となり春に入っても気温は、上昇せず、六月を除いて八月まで低温が続いた。また、六月から一〇月にかけて多雨であった。さらに、戦争終結前後の人心の動揺と人手不足が加わり、かつまた、打ちひしがれた国民を二度の大型台風が襲った。九月一七日の枕崎台風と一〇月一〇日の阿久根台風である。前者は、強風をもたらし、後者は、豪雨をもたらした。勝浦川流域に多雨域ができ、小松島で一〇月七日からの四日間の雨量は、五九四ミリメートルに達し、中小河川が氾

濫した。戦災直後のことで被害を増大させ、空前の大凶作となり、県民を飢餓線上に追いやることになった。一三〇キログラム（一位）。